

しぶちん

山崎 豊子 著

「しぶちん」とは、大阪弁で「けちん坊」のことを言います。標準語の「ケチ」と違って、悪口の中にもどこか、のんびり、ちよつと笑えるような感じがします。この本は全て大阪が舞台になっていて、5編のうち3編が船場の商人が主人公の話です。船場で商いをするために、伊勢のたくあん売りから大阪の材木問屋に奉公して財を成した「しぶちんの万治郎」略して「しぶ万」とあだ名される男の話や、「御寮人さん」と呼ばれることを夢見て執念を燃やした女の話など、物語の端々に当時の船場商人の生活が描かれています。その中の一つ、むかしの船場では、なんと、年に6回も更衣こもぎをするというしきたりがあったそうです。更衣は気温の寒暖とは関係なく、季節の変わり目ごとに行われていて、少しでも間違えると、「みつともない」と後ろ指をさされたということです。伝統と格式を重んじる商家ならではのかもしれないが、船場が京都の公家社会のような「しきたり」に支配されていたとは、驚きです。

そして何よりも興味深かったのは「船場言葉」です。例えば「わたし」のことを「わて」と言い、「あなた」のことは「あんさん」。でんがな・まんがなの「コテコテの大阪弁」が使われているのですが、少しもしつこく感じない。それどころが、やわらかくて、文字に歌うような抑揚が付いているようでした。今では、文字として見るだけで、日常で聞くこともない船場言葉に、とても惹かれました。

M  
Y



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞